

鎌倉地蔵

むかし、あったと。

源頼朝という源氏の大将が、活躍をしていた頃のはなしだ。

鎌倉権五郎景政という武将は、頼朝より奥州征伐の命を受けたと。景政はその旅の途中、一夜の宿を求め、熊田と呼ばれる郷へ足を運んだんだと。

「われわれは、奥州へ向かう途中である。辺りも夜が更けてきた故、今夜一晚宿をお願いしたい」

と申し出たところ、ある豪家、

「へえ、オラの家でよければ、どうぞどうぞ」

と快く引き受け、家の者たちには丁重にもてなすよう命じたんだと。豪家の名は櫛内家といい、熊田郷でもたいそうな家柄であった。

その晩、一行の旅の疲れをいやすため、櫛内家では、でき得るかぎりのもてなしをしたんだと。その宴に景政によくかしく娘がおった。その娘は櫛内家の一人娘であり、近隣の村でも噂がたつほどの美人であった。景政もいたく気に入ってな、娘はその夜、の仮寝に景政の寵愛をうけたんだと。

翌日、景政は主人に

「世話になった」

と告げ、娘には、

「また必ず戻る」

と誓い、奥州へと旅立って行ったんだと。

その後、娘には、玉のようなかわいい男の児が生まれた。家中の者が喜んでな、景政が再び熊田郷へ来てくれるのを楽しみに待ってたんだと。

時が経ち、奥州の地もやがて平定され、景政率いる鎌倉勢は凱旋し、景政は再び約束どおり熊田郷へと足を運んだ。だが久しぶりに見た熊田郷の様子は、変わり果てていたんだと。村人の数もなぜかチラホラしか見えず、愛する娘のいる家の前で、いくら呼びかけても返事をするものは誰もいなく、家のみ淋しく残されていた。

景政は、そこへたまたま通りかかった一人の村人に、

「櫛内家はここであろう。なぜ誰もおらぬのだ。なぜこんなにも村がさびれておるのだ」と、やっぎばやに聞いたのだと。村人は、

「実はこの夏、村に疫病がはやりましてな。多くの者が死んでしまったんですじや。その中には・・・申し上げずれーんですけども、櫛内家の娘さんも、授かった玉のようにかわいい児もいたんですじや」

景政は愛する者が死んだことを知り、深い悲しみの中、鎌倉へと戻って行ったんだと。

のちに景政は石仏を背負い熊田郷を訪れ、櫛内家の庭に建立し、ねんごろに娘と児の供養をしたそうです。この石仏が、鎌倉地蔵と呼ばれています。

おしまい

参考文献 旧南那須町「まちの民話」より